

## チャン・ユンチア「水域」

2016年2月5日～28日、Art-U room

### ■ 制作ノート

私はこの「水域」の連作によって、五年ぶりに油彩画での制作へと立ち戻りました。この五年間、私は様々な素材による制作を行なってきましたが、その間、素材の選択そのものが、私の作品の大変重要な様相を成していたのです。しかし同時にこの五年間、私は油絵の制作に飢え、渴望していたのです。

油彩画は15世紀のヨーロッパで用いられるようになりましたが、その時代とは、制度化された宗教が次第に求心力を失い、代わりに科学が繁栄し始めた時代でした。それは論理と魔術が共存した時代であり、また原初の科学と錬金術がない交ぜになっていた時代でした。油絵の具は、土壌や金属から得られた色素に、植物から得られた油を混ぜ合わせたもので、いわば錬金術の副産物でした。そして現在、この油は、石油化学工業の副産物であるアクリルに取って代われ、アクリル絵の具となりました。私たちはもはや魔法のない時代に生きており、恐竜から抽出されたジュースを車に汲み入れて仕事場に向かう、といった世界に暮らしているのです。

この連作に取り掛かってみて意外だったのは、私が描く油絵の中に水のイメージが立ち現れてきたことです。最初はただの背景として現れた水は、制作が進むにつれて、次第により目立つ存在となってきました。人の身体のおよそ70%は水でできている、熱帯地方は特に湿度の高い地域です。マレーシアの平均的な相対湿度は70~90%であり、私たちの先祖たちは皆、移民として水を渡ってきました。大気中の水蒸気はあらゆるものの中に入り込み、生命を授け、活気を与え、息苦しくさせ、かびを繁殖させ、溶解し、消失し、忘れ去られ、リセットされ、再びみずみずしく生まれ変わっては澱み、死に、再び生まれ変わり… こうして何層にも積み重なった歴史と物語が、残されていくのです。

水と油は互いに混じり合わず、油は水の上に浮く。だから私にとって油絵を描くことは、自分が無意識としているものを、水面に浮かび上がらせる行為のようなものであります。私が絵を描く時、私の脳は時間や日付、名前、出来事、それらの出来事の原因や目的を思い出し、その一方で、私の指は、手触りや質感、味や匂い、音や感情を思い出すのです。私にとって絵を描くことは、ある意味その時々を感じた感覚を追体験することであり、とりわけこの連作では、この湿気に満ちた国 — 生命に溢れいつでも新鮮さを失わない一方、忘れっぽくて、私たちがこれまで築き上げてきたものを維持することに失敗ばかりしている国 — に育った中で経験してきた様々な感情を振り返って見ることなのです。

そして最後に、恐らく私は、あたかもカエルが雨を呼び求めて鳴くように、望みを託して絵を描いているのかもしれませんが。激しい雨が、悪臭を放つ全てのものを洗い流し、再び一からやり直せる時が来ることを願いながら。

2015年11月30日 チャン・ユンチア

(\*英文の原文テキストより翻訳)

## ■ 作品リスト



### 「湿った記憶」 The Memory is Humid

2015年、油彩・キャンバス、92x45.5cm

白人になろうとした裸の少女が、稲穂でできた西洋風のガウンを身にまとっている。彼女の髪までもが稲穂でできている。水平線の向こう側には、エリザベス2世が立っている。そのガウンは海原の波でできている。



### 「海を渡る」 Crossing the Sea

2015年、油彩・キャンバス、45x30.5cm

椰子の実は、海を漂い地面に辿り着く。たとえそこがどこであろうが、辿り着いた土地の上に根を張る。私の祖先たちは舟で海を漂い、そして大地に辿り着いた。そしてたとえそこがどこであろうが、上陸した大地の上に根を張った。しかし私は未だになお、洋上を漂っている状態にあるかのように感じる。大地は私を歓迎するが、しかし、国家は私を十分には歓迎していないようだ。椰子の木の葉は、中国語でこの言葉を形づくっている。「愛よ、お前がいなければ、私は一体どこに存在できるだろう？」



「この瞬間」 The Moment

2015年、油彩・キャンバス、75x150.5cm

昔、生きた鶏が市場で売られていた頃、人々は買った鶏を持ち帰りやすいように新聞紙で包み、家で絞めて調理したり、あるいは数ヶ月間飼った後に殺して調理した。当時、新聞紙に包まれた鶏は普通の光景であったが、今はそうではない。その習慣が行なわれなくなって初めて、私は、鶏を新聞紙に丸め込み、紐で締め付ける行為が極めて残酷なことであると気付いた。

この絵の中の新聞紙に見られる記事は、現在マレーシアのメディアを賑わせている幾つかの出来事について書かれたものである。私たちは、これらの出来事を当然の事と見なしているが、実際のところ、新聞紙に包まれた鶏と同じ位異常な出来事なのである。



「ある芸術家の生涯」 An Artist's Life

2015年、油彩・キャンバス、66x85cm

この作品は、ヘルマン・ヘッセの小説「ロスハルデ」の中で記述されている絵画を、私なりに翻訳したものである。その絵画とは、小舟に乗った一人の漁夫と、彼が捕えた二匹の魚を描写したものである。私はこの小説を二十年前に読み、この漁夫のイメージは、その後もずっと私の記憶に留まっていたのだが、今になってやっと、このイメージを描くのに十分な成熟と経験を積んだと感じられた。私はこの作品を、できるだけ小説に書かれている通り忠実に描こうとしたのだが、それでもこの「翻訳」の作業から漏れ落ちるものがあった。それは、例えばその時の天候や、漁夫の属する民族と服装、魚の種類、小舟がどんな木材で作られていたのか、といった様な事柄である。

私はこの架空の漁夫が住む土地から遠く離れた所に住んでいる。私は彼の実存主義的な不安を感じるものの、私が描くことができる漁夫の環境は、私の暮らす環境と、その環境に影響されて形づくられた私の思考と感覚に基づいてのみ表現することができる。この漁夫と同様、私は私固有の境遇に置かれていて、私が生み出すことができるものは、私を取り巻く環境が私に授けてくれるもの次第なのである。



「月光」 Moonlight

2015年、油彩・キャンバス、85x66cm

私の干支である兎は、次のようにして私にとってのシンボリックな動物となった。— 昔ペットとして兎を飼っていたが、繁殖して増え過ぎ、また、同系交配によって凶暴になった。それは私がまだ子供の頃のことだった。結局私たち家族は、兎を全て食べてしまった。こうして兎は私の体内に留まったのである。

私は兎を撫でていた感触を覚えている。兎をなだめるために、滝を滑らかに流れ落ちる水をイメージしながら、指で背中を撫でていた感触を。



## 「水槽」 Aquarium

2015年、油彩・キャンバス、75x150.5cm

毎朝、私が扉を開けると、ペットである犬の唐三彩は、背伸びしてあくびをしながら私に挨拶する。それから私たちは散歩に出掛ける。毎朝私は近所の人々に会い、彼らは私たちに挨拶する。この絵に描かれた人々は、私のご近所さんの何人かだ。

この絵を描いている最中、マレーシア全土は、公正な選挙の実施と首相の辞職を求める、今までで最大の街頭デモに備えていた。その数ヶ月間というもの、マレーシアに暮らす私たちは、誰もがその事ばかりを話題とし、誰もがその事ばかり考えていた。

デモが終結した後、唐三彩はめでたくも起こった出来事のことなどすっかり忘れ、以前と同じ様に私に挨拶するだろう。近所の人たちも、私たちを見掛けたら、依然として私たちに挨拶するだろう。けれども、ひょっとしたら彼らは既に変わってしまっているのかもしれないし、もしかしたら私も変わってしまっていて、そしてその後もまだ変わり続けるのかもしれない。しかし、この絵の中では、唐三彩は水槽の中に留まり、ガラス越しに現実の世界を眺めている。



「涙：我が血が注がれた土地よ」  
Tears: Tanah Tumpahnya Darahku

2015年、油彩・キャンバス、120x18cm

この絵は一見、中国の絵画に似ている。更に注意深く見るなら、描かれた葉は全てローマ字のアルファベットになっていて、こう綴られているのに気付くだろうー「TANAH TUMPAHNYA DARAHKU」。これはマレーの言葉で、マレーシアの国歌「ネガラク」（我が祖国）の二行目の歌詞から採られている。意味は「我が血が注がれた土地よ」、である。



### 「採掘抗の池」 Mining Pond

2015年、油彩・キャンバス、92x61cm（2点組、各46x61cm）

この絵は2枚続きの絵画になっていて、縦に2点繋げて並べても良いし、あるいは横に別々に並べて飾っても良い。

この作品は、以前電車で旅行した際に通り掛かったペラ州のアヒル農園に想を得ている。こうした農園は、元々は錫の採掘抗があった所であり、後に廃坑となった場所である。放棄された坑道は、たちまち大量の雨水によって満たされ池となった。その後、企業心に富んだビジネスマンたちがやってきて、これらの池でアヒルを飼育し、その肉や卵を売り始めた。



### 「雨の中の人1」 Man in the Rain I

2015年、油彩・キャンバス、55x25.5cm

この絵は、激しい雨の中にいるオランウータンの姿を描いたものである。「オランウータン」という言葉はマレー語からきていて、「森の人」という意味である。「オラン」は人を意味し、「ウータン」は森を意味する。

オランウータンは温厚で、シャイな生き物である。雄のオランウータンは、密林の奥で深く瞑想する僧のようにも見える。



### 「雨の中の人2」 Man in the Rain II

2015年、油彩・キャンバス、  
65x45cm



### 「流木の人」 Man of Driftwood

2015年、流木に彫刻・陶製のタイルが付いた拾われたコンクリート片、  
33x15x12cm

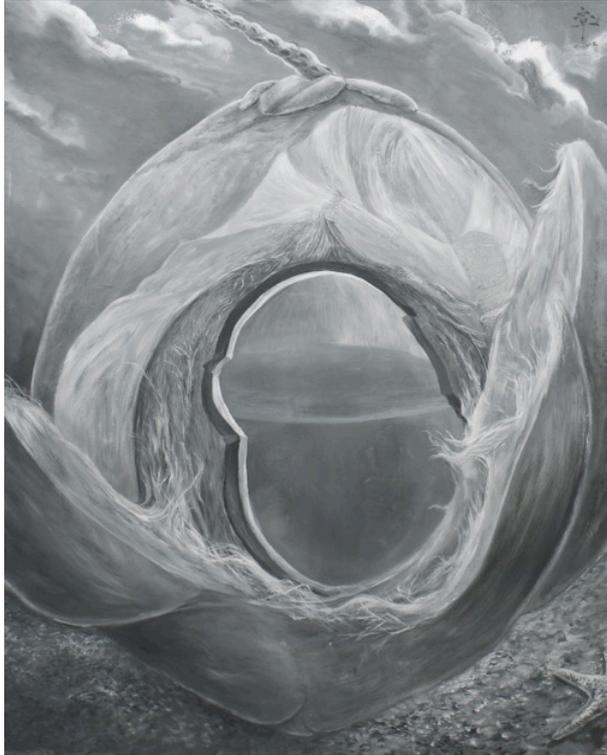
この作品は、かつて錫の採掘場があったパハン州の町、スンガイ・レンビンの川岸で見つけた流木から作ったものである。かつてこの町には、大英帝国に属する世界一の錫の地下採掘坑があり、スンガイ・レンビンの町全体が、この錫の採掘に依存し繁栄していた。現在、錫の採掘は放棄され、これに従事していた鉱員たちも取り残された。年を取り、ほとんど忘れ去られてしまった彼らは、今なお若かりし頃の思い出にすがり続けている。



### 「井戸」 How are You? I am Well.

2015年、油彩・キャンバス、65x45cm

年末に学校が休みになると、私の家族はペナン島にある祖父母の家に車で出掛けた。それはクアラルンプールからかなり長距離のドライブとなり、私たちは道中にある親戚の家のどこかで車を停め休憩した。そうした家の一つが、ペラ州の小さな町、タンジュン・トゥアランに暮らすおじの家だった。その家には水道が通じていたが、おじは井戸の水を使い続けていた。私たち家族は、大抵、暑さの厳しい真昼頃におじの家に着した。井戸の水はいつも冷たく、気分をリフレッシュさせ、大地の新鮮な匂いがした。井戸の中を覗くと、その底には、小さな男の子の姿をした私の鏡像が写っていた。私がおじの男の子に呼びかけると、男の子はこれまで返事を返してきた。



「水域」 Body of Water

2015年、油彩・キャンバス、85x66cm

私たちは学校で、椰子が大変役に立つ植物であることを学び、感銘を受けた。その幹を用いて家に上がる階段を作ることできるし、葉っぱを編み合わせて屋根とすることもできる。葉の茎は、束ね合わせると箒になるし、椰子の実の各部分は様々な用途に用いることができる。殻の繊維は、良く燃えるのでたきぎになるし、また、蘭を植えるのに非常に適した培養土にもなる。固い実の部分も良く燃え、また、加工してカップやお椀、更には貯金箱として用いることもできる。実の内部の水は美味しく、熱を冷ますのにも効く。果肉はそのまま生で食べることもできるし、あるいはミキサーにかけて漉すと、ビーフカレーやチキンカレーを作るのに欠かせない素材である「サンタン」（ココナッツミルク）ができる。

椰子は様々な機能を有し、また環境にも上手く順応している。椰子と同様、ここマレーシアに暮らす人々は、丈夫で順応性があり、様々な言語を話し、多様な作業を創造的にこなすことができる。かつては重要な存在であった椰子が、発展によって見捨て去られた様に、私たちの精神も、いわゆる進歩によって取って代わられようとしている。



「豆鹿の物語」 Tales of the Mouse Deer

2015年、油彩・キャンバス、18x55cm

この絵は、マラッカ州に伝わる古い民話「豆鹿の物語」の一場面を描いたものである。

物語のこの場面では、賢い豆鹿は、川の水を飲んでいる最中に、ワニに咬まれて脚を捕えられてしまっている。豆鹿は、機転を利かしてワニを騙し、ワニが咬んでいるのは脚ではなく木の枝だと思い込ませ、もう一度自分の脚を捕えてみるようにそそのかせた。頭の鈍いワニは、再び豆鹿を捕えようと口を開けるが、その途端に豆鹿は跳び去り、ワニから逃れた。



「ママのところに帰り」 Come back to Mama

2015年、油彩・キャンバス、66x85cm

父は私に、若い頃にオサガメを見掛けた話をする。父たちはオサガメが、産卵のために砂浜を這い上がるのを静かに見守っていた。いったんオサガメが卵を産み始めると、皆は懐中電灯を手に、騒々しくオサガメに近寄った。亀は円卓程に大きくて、父たちは手で触ったり、背中に登ってみたり、フラッシュをたいて写真を撮ったりした。百個程の卵を産む間、オサガメはなす術もなくされるがままに任せ、疲れ果て、涙を流し、口からよだれを垂らしながら耐えていた。オサガメは現在、マレーシアの海岸から絶滅したものと分類されている。

私自身はオサガメを見たことは無いが、ポピュラーなイメージとして、学校の壁画やドキュメンタリー映画、本や観光案内のパンフレット等で目にしてきた。余りにも頻繁にそのイメージを目にしてきたので、私にはまるで、オサガメが自分の一部であるようにも感じられる。父親の過去の時代に生きたこの古代の生物は、人々に虐待され過ぎた余り、私たちのもどから永遠に立ち去ることを決意したかのように思える。



## 「霧」 Vapour

2015年、油彩・キャンバス、  
85x66cm

私のパートナー、ミンワは、かつての強制収容所で育ったことを知らなかった。彼女にとってその「新しい村」は、どこでも自由に歩き回れて、大人たちに可愛がられる幸福な場所であった。随分後になって初めて彼女は、自分が育った環境の由来を知り、自分たち民族の過去にまつわる真実を徐々に見出したのだ。こうして彼女のアイデンティティは次第に形成されていった。

この絵の中でミンワは、まるでスパのトリートメントを受け、洗髪した後であるかのようにリラックスしている。彼女の髪は滝となって流れているが、その滝は、滑稽にも鉄条網で囲われている。滝の流れの様にごく自然なものを、どうして塞ぎ止めることなどできるというのだろうか？



## 「象は決して忘れない」 An Elephant never forgets

2015年、油彩・キャンバス、45x65cm

この絵はこの連作中最後の一枚であり、この旅路に別れを告げるような作品だ。私たちに背を向けた一匹の象が、遙か向こう岸に建つペトロナスツインタワーの方を眺めている。かつてこのビルは、世界で最も高い建築物だったが、現在では他のビルに追い抜かれてしまった。それはまるで、かつて私がアーティストとしての人生を歩み始めた時に感じた楽観的な考えに良く似ている。未来はどのような姿をしているのだろうか？私には分からないが、しかし、象は決して忘れることなく覚えている。